信州大学環境科学論集　第9号，1987
〔Bull. Environ. Conserv., Shinshu Univ.〕

森からの訴え

An Appeal from Forests

信州大学理学部　只木良也*

ANN.　むかし，甲斐の国甲府の農家にひとりの美しい娘があったそうな。名をおことといった。

いつのころからか，おことのところへ，夜ごと通って来る若者があった。初めのころは，おことも恥ずかしく思っていたけれども，いつとはなく，若者を慕うようになった。

二年ほどたったある夜のこと，若者は，いつものように尋ねて来たが，どうもその様子がおかしい。顔の色も青ざめ，涙さえ浮かべている。

「心配事があるなら，おらに話してくりょ」

おことはとうとうたまりかねて，そういった。すると，若者は涙を落として，

「実は，今まで隠していたけれども，おれは高畑村の柳の精だ。今度甲州善光寺のお寺が建つ。明日は切られて千年の命を失うことになった。もう，今夜限り会うこともできぬ。許してくれろ」

というと，たちまち，その姿は消えてしまったそうな。

おことは，しばらく気も遠くなるようで，へたへたとすわりこんでいた。やがて村のあちこちで，コケコッコととりが鳴き出した。

おことは，はっとして立ち上がった。たとえ柳の精とわかっても，夫であった人が，きょうこそ切られてしまうという。おことは狂ったように高畑村へ走った。

しかし，おことがようようたどり着いたとき，はや，柳の木は切り倒されて，人夫たちが力を合わせて引き出そうとしているところであった。

ところが，どれほどの人数が取りついても，柳の木はびくとも動かない。

おことはたまりかねて飛びだすと，柳の木にひしとすがって，涙をはらはらと落とした。そして，若者がよく歌っていた歌を歌った。

歌うおことの涙に霞んだ目に，若者と過ごしたしあわせな日が浮かんでは消え，浮かんでは消えた。その姿を人々はただ，しんと見守った。

歌い終わると，おことは，

「さあ，きっとこれで動きやす。引いておくんなさい。おらもついて行きますに」

というた。

そしておことが綱に手をかけると，不思議にも柳の木はするすると動きだし，善光寺の建つ里へ，無事引かれていったという。

この柳を棟木とした本堂は，今も，甲斐の国甲府の善光寺町にそそり立っている。

------ ただ今のは，日本に古くから伝わる民話のひとつです。

木が人と感情を通じ合ったり，木や森が人を助けたり，あるいは森や動物が人と会話をしたり・・・というような伝説は，日本にはたくさんありますが，これらは日本人がいかに森や木との深い関係の中で生活して来たかを物語るものです。

ところが現在はどうでしょう。

日本の森林は荒れはじめています。日本人の生活から森は失われつつあります。そしてこれは恐らく，貴方の住んでいる国でも起こりつつあることではないでしょうか。

ANN.　お話しいただいているのは，信州大学理学部の只木良也先生です。

只木先生は，日本人の生活と木との深い関りについて，次のように話しておられます。

------ 日本は，降水量の多い国です。全国平均で年間約1800㎜の降水があり，それも夏に多く降ります。そしてその夏の気温は高いのです。つまり，森林が育つ条件が十分に満足されているわけで，大昔は国土のほとんどすべてが森林に覆われていたに違いありません。何千年にも及ぶ日本人の活動は，平地を中心にして森林を農地や街に変えてきました。しかし，今なお国土の三分の二は森林なのです。だから日本人は，森林のある景色をあたりまえと思っています。都市に緑は少なくても，都会から少しでるとかならず森や林が見えてきます。子供に野外で写生をさせても，必ずといってよいほど木の一本や二本はかき込まれているものです。

森林に覆われていることは，手じかに木材が得られることでもありました。家，建物，箪笥，机，ふすま，障子，桶，樽，お碗，箸などはいうに及ばず，日本人はありとあらゆる物に木材を利用してきました。それも，種類の豊富な木材を用途によって使い分けてきたのでした。適材適所です。例えば，トネリコという木は，材に弾力

* Y. TADAKI
Fac. Science, Shinshu Univ.

性があり今野球のバットに使っていますが，6千年も前には斧の柄に使っていたのでした。そして薪や炭といった熱エネルギー源としての利用，さらに，森林の落ち葉や下草は農業用肥料としても用いられてきました。それに加えて，森林は日本の景色の中心的存在で，日本で良い景色という場合には必ず木や森がありますし，森林は水源を守り，山崩れを防ぎ，気候を和らげ，またその存在は日本国民の心に繊細で穏やかな情緒を育んできました。日本文化を「木の文化」と呼ぶのも当然のことでしょう。

雨の多い湿潤地帯では，切株から芽が出やすいし，地面に倒れ伏した枯れ木の上にも若木が発生してきます。森林が再生しやすいという条件は，成熟は死をもたらすが，死から再び生が蘇るという輪廻の思想を，具体的に見せてくれます。後生を願う仏教的思想が根付き発達するのは，湿潤地帯にこそふさわしいといえます。そしてそれは，永らく日本人の思想を支配してきたのでした。

ANN. その文化の基とも言える森林を，日本は二度にわたって過剰伐採するという経験をしました。一度目は第二次世界大戦遂行のための重要な資源として，二度目は1960年代の経済成長期の資材としてでした。その結果はどうだったでしょうか。

------ 戦中戦後の伐採によって，伐りっぱなしの個所は150万*ha*という広大な面積に達しました。 洪水災害などがあい次いで，森林の重要性を改めて認識し，全国的な大造林運動が，1950年から展開されました。そして，1956年までのわずかな期間に，150万*ha*の造林を完了したのでした。 戦後の混乱期に，これは大変な努力であったと思います。

1960年代の伐採は，経済成長の好景気によって木材の需要が増加し，伐採が奥地の天然林へと進んだものでした。これは，まだ若い人工林の成長量を先食いしたもので，天然林の伐採跡地は人工林化され，さらに広葉樹林を効率の良い針葉樹人工林に変える積極的な人工林化が進められました。その結果，いま日本の森林面積の内，人工林は40%に達しています。

木材の高騰は，外国産材の輸入を進めることにもなりました。

経済成長の結果は，環境汚染を生みました。そして，都市の緑はなくなり，郊外の田園や丘陵地帯は工場や宅地に変わりました。建設資材としての砂利採りのため姿をなくした山もありました。森林地帯も，ゴルフ場や遊園地化が進み，山岳道路が山肌を切り裂き，広大な伐採跡地も目立ちました。また，山村からは若者を中心に人口流出がつづき，労働力不足の山地には，手入れされない人工林が残されることになってしまいました。

ANN. 伐採は海外に及び，しかもそれ等の木材は国内材より安いため，
なりました。海外での伐採と，外国材の大量流入がもたらしたものはなんだったのでしょうか。続いて先生のお話を聞きましょう。

------ 輸入木材の故郷は，主として東南アジアと北米です。東南アジアの熱帯林は，日本が伐り荒らすと不評をかっています。実情は，木材の量だけを見れば，熱帯の木材産出国の燃料材を含めた木材消費量の2，3割程度なのですが，日本の伐採が現地熱帯林破壊のきっかけとなったことは，否定できないかもしれません。熱帯林については，今後その回復や計画的経営のために，日本は努力や援助を惜しんではなりません。

北米からの材木については，貿易不均衡解消のためにもと，日本への売込みの圧力がますます強まっているのが現状です。

輸入材のほとんどは，天然林を伐採したものです。これに対して，日本国内の木材の主流は，集約に人手を掛けた人工林のものであり，とくに日本は森林地の斜面が急で，造林にも手間がかかり，また育成や収穫の機械化も進みにくい条件をもっていますから，特殊なものを除いては，外国産材と価格的にも太刀打ちできません。したがって，輸入材はますます国内産材を圧迫し，ここ十年余り国内林業は，不況のどん底に落ちてしまいました。何しろ，20年間育てた丸太1本が大根1本より安いのですから。

いっぽう，森林そのものに対する社会的な評価が大きくなって来ている現状にあります。それは，森林が提供してくれる良質で豊かな水，防災的な働き，気候を和らげ大気を保全する働き，美しい風景等々，森林が与えてくれる数々の恩恵に対する期待にもとずくものです。森へ入ったり，木を眺めたりすることで心が和むのは，私だけではないでしょう。狭い国土に高い山を持つ日本の急斜面を守ってくれるものは，森林をおいて他にはないでしょう。こうした森林の働きは，日常そんなに意識されるものではないのですが。森林は日本の環境のバックボーン，そして，こうした森林の働きは，輸入では賄えないのです。

俗に「緑の効用」とよばれる森林の恩恵は，なにも今始まったものではありません。昔から人々がそれと気付かず受け取って来たものばかりなのです。そしてその森林を守り育てて来た山村の人々の存在を，ついつい見落としていたのでした。

山村の人々の生活手段として林業がありました。林業といえば木を伐ることだと思いがちですが，その伐採という行為も永年森林を守り育てることがなければ，単なる掠奪です。常は緑豊かな森林を維持育成して，数々の無形的恩恵を得る，そして数十年あるいは数百年に一度伐採して木材という物質的恩恵を得，その利益の一部を次代の森林育成へと戻す，というシステムがそこにあったのでした。

そのシステムを維持してくれていた山村が，いま崩壊の危機を迎えています。先にお話ししたような理由による木材産業の長期的不況，そして若者が都会へ流出して過疎が進んだことによる労働力不足，日本の森林はいま荒れはじめ，山の緑の維持はピンチを迎えています。とくに，森林の4割を占めるまでに拡大した人工林地帯でそういえましょう。ツルがからんでそのままになっている林，間引の伐採が行われないため一本一本が細くてひょろひょろで，大雪や風に弱い林，枯れ木がそのままで病気や害虫の源となり，山火事にもなり易い林，根ばりがなくて土を捉える力がないため崩れやすい林・・・，こんな森林が多くなっています。

ANN.　さて，日本の森林の荒廃を一層促しているものがあります。それは，石油文明と，森林を木材価値のみで評価しようとする風潮です。

------ 石油化社会は，日本人と森林の間を疎遠にしていきました。燃料材としての用途，落ち葉の堆肥肥料としての用途はほとんど途絶えました。またプラスチック，鉄，コンクリート等の物質はかっての木材の用途に置き代わって行きました。木材を産出する林業という産業はかっては国の基幹産業だったのですが，その国内における相対的位置はぐんと低下してしまいました。

なるほど，物質的な利用価値という点では，森林の存在価値は低下したかもしれません。しかし，森林の価値はそれだけではありません。

森林の与えてくれる恩恵は数々あります。しかしながら今日まで，ごく一部を除けば，森林の価値というものはそれが持つ木材，あるいは木材を生産する能力でのみ評価されてきました。木材以外の，人間生活環境を保全してくれる森林の働きは評価の外にあったのでした。

今や森林の環境保全の働きは，誰もが認めるようになりました。これは，世界のいろいろな国でも同じであるだけでなく，地球というレベルでも，森林の重要性が論じられるようになりました。

たとえば，大気中の2酸化炭素濃度の問題です。森林は光合成のため大気中から2酸化炭素を吸収し，それを大量に集積している場所です。地球上の全森林には，大気中に2酸化炭素として存在する量の倍もの炭素が蓄積されていると計算されているので，森林が減ってその炭素が大気中に戻ると，大気の2酸化炭素の濃度が高くなり，その結果，地球上の気温があがったり，降水量の分布が変わって北米やソ連などの穀倉地帯に雨が降らなくなることなど，が心配されています。このような地球環境の維持にとって大切な働きを持つ森林を保全していこうという全世界的な運動は，1985年の国連提唱による「国際森林年」となって表われたのでした。

いまや木材の価値だけでは森林の価値は測れない時代です。しかし，「経済」が支配する現在の社会では，木材価値以外に森林を評価する手段がありません。このことは環境として重要な森林が無統制に壊され，また荒廃していくことを意味します。

ANN.　商品価値のある木材を生産する場として森林を見るのではなく，人間が，そして動物が生きていくための環境として森林を見ることが必要な時代であるようです。それでは，この時代に生きる我々一人一人は何をすることが求められているのでしょうか。

------ 現代社会は，刹那的な金銭的利益と効率が優先しています。その考えで行けば，森林も林業も山村も切り捨てられる運命になってしまいます。大所高所から，それがその世界以外の所に及ぼす効果や，金銭に換算しがたい効果を十分考慮する態度が，今世界的にも緊急に必要なのではないでしょうか。それは，木材価格だけでは評価出来ない環境としての森林の価値を正当に評価することなのです。そして，森林からうけた恩恵に対する代償は，また森林へ戻されなければなりません。森林と都市等の人間社会をつなぐシステムを作ることを，国レベルで，また地球レベルで急がなければなりません。

国土の三分の二を森林が占める日本でも，いやそんな日本だからかもしれませんが，森林に関してこんな悩みがあるのです。貴方のお住みの国についても，森林問題を考えてみてほしいと思います。

＊　＊　＊　＊

本稿は，ＮＨＫ製作による海外向けラジオ番組（ラジオ日本）として，1987年1月に放送されたものの台本抜粋である。本稿を第一部，木材や森林の利用方法の新しい試みなどを第二部，海外の森林に対する日本の技術援助等の対応を第三部として，23カ国語で放送された。